

うどんこ病菌の感染によるスナップエンドウ莢の「ごま症」発生実態と防除

鹿児島県大隅地域振興局農林水産部曾於畑地かんがい農業推進センター **樋口 康 一**
 鹿児島県農業開発総合センター **中島 あつし 純**

はじめに

スナップエンドウ（エンドウ；*Pisum sativum* L.）は米国で育成された実エンドウの一種で、日本では1970年代の後半から栽培が始まり、現在は消費者の嗜好にあった人気の野菜として生産されている（中島，2010）。図-1に示したように2012年産の鹿児島県の生産量は全国シェアの1/2以上であり（農林水産省，2016），その大半は冬期の温暖な気候を活かした露地栽培により生産されている。今後も生産の伸びが期待される品目であるが、莢に発生する「ごま症」が生産上の問題となっている。

本稿においてはスナップエンドウ「ごま症」の発生実態とその防除対策について鹿児島県における試験事例（樋口ら，2015）について紹介する。

I スナップエンドウ莢の「ごま症」

スナップエンドウの「ごま症」とは、商品である莢に発生する大小の褐色斑点症状であり（図-2），病害名ではなく生産者、流通関係者による呼称である。図-3に示した栽培試験の事例では、収穫量の45%がA品であったのに対し、36%は「ごま症」やスリップス類の吸汁害によって汚損したB品，8%は「ごま症」による規格外品，残りの11%はその他の要因による規格外品であった。A品とB品では価格差が大きく（A品；約1,000円/kg，B品；約300円/kg，鹿児島県経済農業共同組合連合会調べ），「ごま症」の発生は販売面で不利となる。したがって「ごま症」の発生率低減は所得向上への技術的課題である。風雨などの物理的な要因で汚損した莢も「ごま症」に含められるが，以前から病害との関連性も指摘されてきた。そこで，筆者らはこの「ごま症」の発生実態について調査し，植物病原菌の「ごま症」発生への関与について検討した。なお，調査および試験に用い

た品種は，鹿児島県内のスナップエンドウ栽培品種における占有率が100%（2015年度現在）の‘ニムラサラダスナップ’（みかど協和株式会社）である。

II 「ごま症」の発生に関する植物病原菌

1 発生実態調査

「ごま症」の発生実態調査は2011年3月から13年1月にかけて実施した。調査対象は病害診断サンプルとして産地から調査依頼のあった「ごま症」の莢，または県内の圃場で採集した「ごま症」の莢であり，表面の糸状菌は肉眼または実体顕微鏡下で観察し，さらに莢表面の褐色変部位から切片を作成し，定法により培養して糸状菌を分離した（分離に際しては莢1個から1切片を培養，全157切片）。観察・分離した糸状菌については形態的特徴から属を推定した。症状を図-2，確認された植物病原菌を表-1に示した。「ごま症」症状の大半は莢上に発生した褐色小斑点であり，その他に不整形や放射状の斑点も認められた。斑点は平らなもの，やや陥没したもの等が認められ，若莢では半球状に盛り上がった斑点が観察された（図-2）。調査を通じて「ごま症」の発生に対して最も関与が疑われた植物病害は，エンドウうどんこ病（以下うどんこ病）であった。「ごま症」莢上では，うど

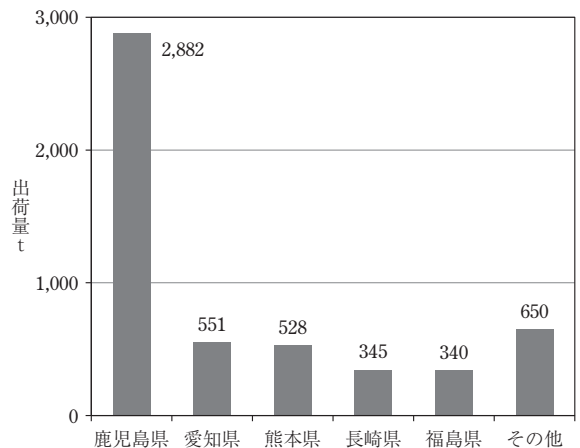


図-1 スナップエンドウ生産量上位5県
農林水産省2012年産地地域特産野菜生産状況調査を基に作成。

Occurrence of Small Spots Symptom Called “Goma-sho” on Snap Pea Pods Caused by Powdery Mildew Fungus, and its Control.
By Koichi HIGUCHI and Atsushi NAKASHIMA

(キーワード：うどんこ病，エンドウ，スナップエンドウ，体系防除)